

ゆりいか通信

第28号

令和8年8月



二学期を迎えるそれぞれの想い

八月も半ばを過ぎると、夏休みの終わりが少しづつ見えてきます。不登校のお子さんがいるご家庭では、「二学期」の文字が頭をよぎり、心がざわざわし始める頃かもしれません。私も自分の子どもたちが不登校だったとき、夏休みの終わりに様々な葛藤がありました。そろそろ生活リズムを戻したほうがよいのだろうか、それとも今無理をさせると悪化してしまうのではないか。宿題は終わらせておいた方が登校しやすいのか、あるいは今からそんなプレッシャーを与えることが逆効果になるのか。学校の話をして切り出してもよいのか、あえて話題にせず見守った方がよいのか。

一方で、子どもを迎える先生方も、「あの子は学校に来てくれるだろうか」「どのようになれば行事の多い二学期を楽しんでくれるだろうか」などと考えておられることでしょう。また二学期の行事は運動会や文化祭など、準備や練習を積み重ねながら迎える行事も多くあります。どの段階から声を掛けるとよいのか迷うところです。当日だけ

の参加でも安心して参加できるよう配慮する一方で、練習段階から入ったほうが参加しやすいのではないかと、準備段階からのほうがみんなとのつながりが作りやすいのではないかなど迷われると思います。それぞれ見えているものが異なるがゆえに、保護者と先生との思いがすれ違ってしまったり、お互いに「分かってもいたりしない」と歯がゆい思いをしたりすることもあるかと思えますが、ご家庭から見える子どもの姿と、社会への入り口である学校から見える子どもの姿、その両方を合わせて見ること、初めて複眼的に子どもの環境を見つめることができるのかもしれない。

「学校」だけに答えを求めるのではなく、地域や居場所なども含めたさまざまな選択肢も視野に入れながら、その子らしい歩み方を一緒に考えていければと思います。

「今、この子にとって何が安心なのか」を一緒に考えようとする。そういった周りの大人たちの姿勢こそが、お子さんにとって一番大切な「育ちの環境」なのではないでしょうか。

Our Activities

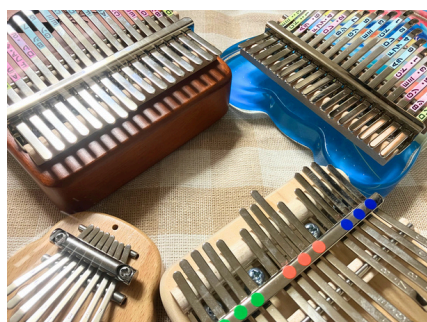
カリンバサークル

始めました

カリンバ体験会での楽しい時間をきっかけに、ゆりいかタイムの中で「カリンバサークル」を始めることになりました。

今回はお盆前ということもあり、参加者は少なかったのですが、今練習している曲をお互いに聴き合ったり、楽譜の中から気になる曲を選んで鳴らしてみたり、おしゃべりを楽しんだり、和やかで楽しいひと時となりました。

カリンバをきっかけに、初めて参加する人も気軽に仲間とつながれる場になればと思っています。これから第2土曜日の午後、ゆりいかタイムで行う予定です。参加者が増えて一緒に音楽を楽しめる場に育っていきばうれしいです。



京都市教育委員会

生徒指導課訪問

8月7日、京都市教育委員会生徒指導課を訪問し、高校生の不登校支援について意見交流を行いました。ゆりいか研究会の活動やこれまでお伝えしてきた内容に関心を持っていただいたことがきっかけとなり、こどもパトナ所長の福知様からお声掛けいただいたことで実現した訪問です。生徒指導課からは3名、ゆりいか研究会からは代表・副代表の2名が参加しました。高校生の不登校支援や高校生年代の若者の「育ちの場」が必要な背景や、ゆりいか研究会で取り組むゆりいかアセスメントの「不登校紹介」とともに、高校生年代の若者たちに必要な新しい「育ちの場」について意見交流を行いました。行政の皆さまと直接お話しできる貴重な機会となりました。大変有意義な時間となりました。

ゆりいか勉強会

カリンバ体験会報告

7月のゆりいか勉強会では教職員・若者支援者を対象にカリンバ体験会を行いました。京都新聞の記事を見て参加された方や、知り合いから誘われた方などさまざまでしたが、自己紹介をする和やかにスタート。

さまざまなカリンバを手にとってみて、お気に入りの1台を選び、「きらきら星」に挑戦しました。みなさんすぐに演奏できるようになり、一緒に音を重ねる楽しさを味わいました。

後半は「私だけのチャイム」づくり。「寝る前にほっとするため」「休憩後に気持ちを切り替えるため」など、それぞれの生活に寄り添うチャイムが完成しました。

プログラム終了後も調律体験したり別の曲に挑戦するなどみなさん心ゆくまでカリンバを楽しんでいただきました。



Upcoming Events

8/23
(日)

◆ フラッペ勉強会・交流会

今回はテーマを決めない「ゆるりお話し会」です。**午前中開催**です。ご注意ください。

8/23
(日)

★ ゆりいか勉強会

「子どものトラウマと心理支援」
中島陽大先生をお招きしての勉強会です。

9/12
(土)

♥ ゆりいかタイム

カリンバを弾きたい人も、他のことがしたい人も、のんびりしたい人もぜひどうぞ♪

9/20
(日)

◆ フラッペ勉強会・交流会

「お友だちとのコミュニケーション」について学びを深めたいと思います。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◆ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

音が消えたあとに残るもの

私は音楽療法士として、病院や福祉施設などで音楽療法を行っています。

音楽療法士をしていると、「音楽療法ってなんですか？」と尋ねられることがあります。

「音楽で癒すのですか？」「リハビリをするのですか？」どれも間違いではありませんが、それだけでは表しきれないようにも感じています。

音楽は昔から人々の暮らしの中にありました。人と人をつなぎ、ときには言葉にならない思いを支えながら、人々の暮らしとともにあったように思います。音楽療法では、歌ったり、楽器を演奏したり、音楽を聴いたりしながら、その人らしい時間や表現を大切にしています。

音楽療法場で、ときどき「上手にできなかった」と申し訳なさそうに話される方に出会います。

もちろん、音程やリズムを大切にしながら音楽を楽しむことも素敵なことです。けれども私は、そのような「上手さ」だけ

では語れない音楽との出会いをたくさん見てきました。

歌う、楽器を鳴らす、静かに耳を澄ませる、ただその場で音楽を味わう、物思いにふける……。同じ音楽の中でも、表現は一人ひとり異なります。どのように音楽と関わるかに正解はなく、その方らしく音楽と過ごす時間そのものが大切なのだと思っています。

音楽療法の時間の中で、私が好きな場面の一つに、曲が終わったあとの静かな時間があります。ある方は思い出を話してくださいました。ある方は目を閉じながら音の消えていく様子に耳を澄ませておられました。またある方は何も話さず、穏やかな表情で頷いておられました。曲が終わったあとに残るものも、人それぞれです。けれども、その思いが必ずしも言葉になるとは限りません。

私はこれまで、音楽療法の中で出会った方々から、言葉にならない思いにも大切な意味があることを教わってきました。

言葉にしなくてもいい。何か意味のあることばかりしなくてもいい。すぐに答えを出さなくてもいい。そんな時間があってもいいのだと、音楽の時間の中で何度も教えていただいたように思います。

私たちは日々たくさんの情報に囲まれ、気づけば答えや結論を求めてしまします。私自身も最近、そうだったように思います。

でも、人の気持ちはそんなに簡単なものではありません。

音楽の最後の一音が消えていくように、出来事にも、人との出会いにも、自分自身の気持ちにも余韻があります。その余韻の中にあるものを、急いで意味や答えにしくなくてもよいのかもしれない。

私はそんなことを、音楽療法の中で出会った方々から教わってきました。そして今は、私自身もその余韻をもう少し味わってみたいと思っています。

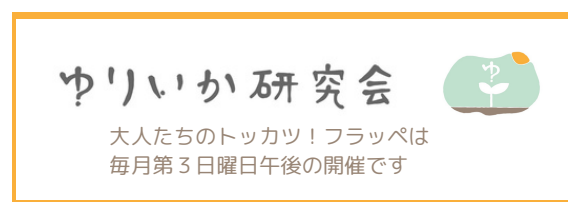
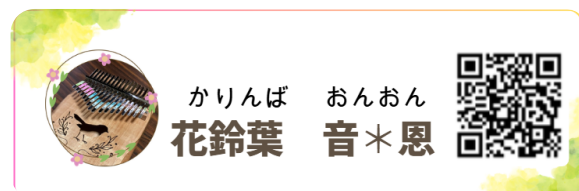
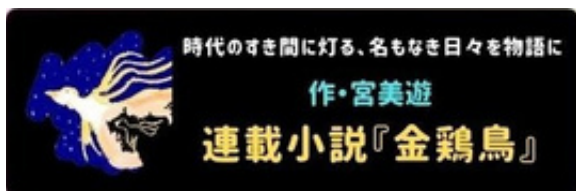
洛和会京都音楽療法研究センター

音楽療法士 安達紗代

Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（順不同）



多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま、クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire community におきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



ゆりいか研究会カリンバのイラストができました♪



カリンバを使って活動することも多くなってきましたので、この機会にカリンバ関係のイベントやプロジェクトにつかうイラストを作成しました。

カリンバを通して、楽しく人とつながる時間を届けたい——。そんなゆりいか研究会のカリンバ活動をイメージしたイラストです。

これから、カリンバに関するイベントや活動で使っていきたいと思います。

《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

少年期 (六)

兄辰郎に続いて信男も水車小屋の中に入り、杵が止まっているのを確認する。溜まっている糠を篩（ふるい）にかけて丁寧に取った。糠が溜まりすぎるときれいな米にならない。作業が終わると、外に出て堰を抜く。川の水がちよろちよると流れ始めた。水車の周りについている箱に水が溜まるとまた水車が回り始め、杵も動き出す。石段を上がり、水車小屋の隅の寢床に入る。机の上に置いたカンテラを消して布団から首だけ出して寝た。あたりは真っ暗闇で、川の音だけが聞こえる。大事なお米をネズミに食われないようにと祈りながら二人は眠りについた。

朝日が登ると目覚めた二人は、

「おはよう」

「おはよう、腹へったなあ」

「急いでかえろ」

と声を掛け合ってさっさと家に帰った。

「ご苦労さんやったなあ」

いつもの母のねぎらいの言葉にほっとする。温かい味噌汁を飲んで元気が出た信男は、教科書と弁当を持って学校に向かう。兄は農業学校に向かって行った。

これは毎日の習慣なので、信男たちは苦にもならなかったが、北風の寒い夜や、雨降りの夜は、嫌で嫌で泣きたい程だった。それでも行かなければならないので、毎日水車小屋へ向かう。

その日もいつものように石段を降りて、堰を止めて米の糠を落とす中ぶるいをし、堰の板を抜いてまた水車を回した。

そして寢床へ入ってカンテラの火を消すと、布団に潜り込んだ。すると上の方で、時々カサカサと音がする。

「兄ちゃん、上で何か聞こえる」

「カンテラつけるわ」

辰郎がそう言ってカンテラの火を点けた。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれからも楽しんでご一読ください。

絵：落葉画廊

編集後記

先月号の活動報告に京都新聞の取材を受けたことを書きましたが、掲載された紙面を見てびっくり。思いのほか大きな記事で、写真も大きく載せていただきました。「こんなに大きく載るとは……」と、驚くやら照れくさいやら。けれど、反響も大きく、新聞を見たという方から声をかけていただいたり、連絡をくださったたり、この記事をきっかけに実際にゆりいか研究会の活動に足を運んでくださった方も何人かいらっしゃいました。この記事が新しい出会いにつながったと思うと、「思い切った取材を受けてよかったな」と思っています。さまざまな形でゆりいか研究会を応援してくださる皆様に心から感謝しております。

(恩庄か)

おしらせ

★活動拠点にしているこりす西陣は、都合により9月末まで「お茶の間」の営業をお休みしています。ゆりいか研究会にお越しになられる際は事前にご連絡いただきますようお願いいたします。

★令和8年7月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。関心おありの方にご紹介ください。